

「見捨てられた神」

詩篇  
マルコによる福音書

第22篇 1節～3節  
第15章 33節～41節

説教 本庄侑子牧師

十字架の上で息を引き取られる直前、主イエスは大声で叫ばれました。「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」(マルコによる福音書 第15章34節)人々はがっかりしたことでしょう。彼らが求めていたのはローマの支配から解放し、彼らの国を建て直してくれる王でした。ほんの5日前、彼らは主イエスを大歓迎しました。主イエスが超自然的な力を発揮して奇跡を起こす姿を見てきたからです。

世界も、私たちも、あらゆる問題に対して「力」を求めます。自分の願いをかなえてくれる力。苦しみから解放し、不条理に輝かしい解決をもたらす力。そして、そんな力を持つかに見えるものに熱狂的になります。しかし、期待に応える力がないと分かった途端、捨て去っていき、次の力ある何かに期待を寄せていく。それを繰り返してきました。しかし教会は、神の最大の力を、あの主イエスの叫びにこそ見出しました。

主イエスの叫びは主ご自身が考え出したのではなく、詩篇22篇の言葉だったと言われています。神の民イスラエルが歴史の中で叫んできた叫びを口にされたのです。詩人は周りの人たちに苦しめられていると訴えます。しかし、最もつらい苦しみは、神に見捨てられているとしか感じられないことでした。詩人は神を真剣に信じてきました。だからこそ、叫ばざるをえなかった。わが神よ、なぜ黙っておられるのか、と。

遠藤周作の小説『沈黙』が話題を集めています。遠藤はある時、病を患い、入院生活の中で病の回復を祈りました。しかし祈ってもよくなりません。周りを見れば、子供たちが病に冒され、息絶えていく姿を繰り返し目にすることになる。神がおられるなら、なぜ何もなさらないのか。そう問い続ける中で、あの『沈黙』という作品が生まれたそうです。

苦しみ、不条理の中で直面する神の沈黙は、神を信じるからこそ生まれる真摯な苦悩であり、世界の根底に流れ続けてきた重苦しい問いです。私たちの内にも、神などいるものかと叫びだしたい孤独や闇、過去があります。

「わが神、わが神、なにゆえわたしを捨てられるのか。」(詩篇22篇1節)そう叫んだ詩人は、実際は神から捨てられたわけではありませんでした。しかし、主イエスは完全に捨てられまし

た。何のためか。私たちのためです。私たちに伝えるためです。『私がいる。ここに私がいる。』と。

父なる神にとって、主イエスを十字架から降ろし、不条理を力業で解決することなど、たやすいことでした。しかし神の力は、独り子が十字架につけられて死ぬ時、沈黙を守ることにおいて発揮されました。主イエスにとっても、人々が期待する力をふるって、十字架から降りることなどたやすいことでした。しかし、神の力は、主イエスにおいて人の罪を身に負い、命を捨てるということにおいて発揮されました。苦しみ悶えながら、私たちの誰も経験し得ない最も深い闇と不条理の中に、神に見捨てられた世界に、自ら飛び込んでいかれたのです。

どうしてこんな重荷を負わされるのか、と叫びたくなる時があります。しかし、主イエスの十字架の道行きを辿り、絶望の叫びを聞き、それらを通して沈黙を貫かれた神に気づかされると、神などいるものかと叫んでいた神の沈黙の真ん中に、黙々と十字架についておられる主イエスが見えてきます。神はどこにおられるのか！そう叫んでいた自分こそが、期待外れの救いを罵り、十字架につける！と叫んだ群衆の一人であったことが見えてきます。

主イエスの叫びと死によって、主イエスが関わらない苦しみは、この世界からなくなってしまいました。それだけではありません。主イエスは3日目に復活されました。苦しみ、不条理、闇に閉ざされた過去に至るまで、復活の光が照らされ、もう無意味だとは言えなくなってしまいました。主イエスは言われました。「自分の十字架を負うて、わたしに従ってきなさい。」(8章34節)私たちそれぞれに負うべき十字架があります。それは意味なく耐えなくてはならない、単なる苦行ではありません。主イエスと結び合わされ、復活の光に照らされた意味ある使命、終わりの日の栄光に輝く、命の使い道です。

教会は神の沈黙という問題に対して、終わりの日に至るまで沈黙をもって答え続けます。深い悲しみの中でも、自らも沈黙を守るようにして、自分の十字架を負い続けます。終わりの日の栄光に照らされて、今日という時を最も深く生きていくのです

(記 本庄侑子)